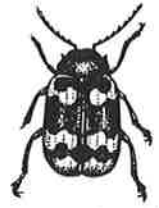


財団だより

多摩川

1989. 3 第41号



イタドリハムシ (ハムシ科)
川原に多いイタドリの葉を食べる。体長10mm。



暖かくなってくると多摩川は多くの人で賑う。(世田谷区玉堤の川原)

■ 多摩川風物誌 ■

(12) 多摩川でのレクリエーション

浅川との合流点

80%以上の人があたり自転車に乗ったりして20分もかからない所から訪れている。自宅から河川敷までかかる時間の平均をとってみると、2月は17.4分、9月は7.6分であった。河川敷での滞在時間は2~3時間が最も多く、浅川の場合には特に冬に1時間以内でひきあげてしまう人も少なくない。河川敷での過ごし方は、冬は「ふらりと立ちよる」「なんとなく歩いてみる」「犬の散歩で立ちよる」「休憩する」「釣りをする」など。秋は「釣りをする」が圧倒的に多く、「水遊びする」「なんとなく歩いてみる」などである。9月3日、4日で、虫や鳥にとっては秋でも、人間にとっては残暑きびしい頃であった。いずれにしてもごく近所の人々としての利用がみられる。その他でも「鳥をながめる」「草花をながめたり、つんだりする」などもある。秋には魚が放流され、釣りの解禁とともに「釣り」に集ま

る。魚の放流は、河川敷に足をむけるきっかけをつくるのに役立っているらしい。多摩川に足をむけるきっかけとしては、冬には「広い」「緑が多い」「水辺がある」「鳥がいる」など様々な要因があるが、秋には「魚がいる」が多く、次いで「水辺がある」と、河川敷よりも水辺に目的がある。河川敷のどんな所に行くかという問に対しては、冬は、「川原」「水辺」「土手」「堰」「草丈の低い広々としたところ」「草のしげったところ」「樹木のあるところ」と、中広く多様な場所の利用がみとめられるが、秋には「水辺」「川原」と、川そのものへの集中度が高い。この浅川合流点の場所は、利用者にとって「ぜひ必要」な場所であり、もしもその場所がなかったら、「もっと速くても似た場所をさがしていく」人がほとんどである。

(※本文中の図表の指示は編集部により省略いたしました。)

「多摩川をめぐる自然環境の保全・回復および利用計画に関する基礎的研究」1984年 立花直美
財団法人環境浄化財団(学術)研究助成No73より部分掲載

多摩川散歩

●古代の多摩をあるく

東京都埋蔵文化財センター 調査研究員 松崎元樹

日野市と多摩市が接するあたりを流れる大栗川は、下流で乞田川と合流して多摩川に流れ出る。この流域には、多摩の古代を物語る遺跡が多く、私たちが遠くいにしえの世界へ誘ってくれる。

京王線百草園駅で下車し、南西の丘陵にのぼってゆくと梅林で有名な百草園に着く。2月の中旬には紅梅や白梅が咲き、訪れる人の目を楽しませている。ここから東に延びる丘陵の北側には遺跡が多く、かつて、平安時代の経塚なども発見され、経典を納める筒や刀が出土したという。駅に戻り線路沿いに東に進むと、現在も発掘調査が行われている落川遺跡がある。この遺跡からは、古墳時代～奈良・平安時代の大規模な集落が見つかり、古代の土器や瓦のほか、鉄製品などが多量に掘り出されている。とくに、古代末から中世にかけての資料は、当時の多摩の様子を知る上で貴重である。さらに東方200mには、武蔵一ノ宮と推定される小野神社が鎮座し、この周辺が奈良時代から信仰を集める重要な地であったことがわかる。

一ノ宮から宝蔵橋の手前を大栗川沿いに西へ道をとると、右手に丘陵が連なる。厚生荘病院裏手の台地上には万蔵院台古墳群、大乗寺にかけての台地斜面には中和田横穴墓群が存在する。いずれも、古墳時代後期（6～7世紀）に在地の有力豪族によって造られた墓である。万蔵院台古墳群は円墳で川原石積みの横穴式石室をもつが、中和田横穴墓群の場合は、関東ローム層（赤土）の崖に穴を穿つ簡単な構造である。両者からは、鉄の刀や矢じりのほか、土器や装身具が見つっている。

大栗川を渡り、対岸の台地上には塚原古墳群が位置する。もとは40～50基もの円墳が存在したが、宅地化が進むにつれ減り、現在では8基を残すにすぎない。昭和62年に多摩市によって5号墳が調査され、川原石積みの横穴式石室内から多量の鉄

製武器が検出され、注目を集めた。この古墳から東南約600mのところには、都の指定史跡になっている稲荷塚古墳がある。径34mの円墳で、わずかに墳丘を残し、内部に凝灰岩截石を用いた立派な横穴式石室がある。この石室の構造は前と後の二室に分かれ、後室は壁が楕円形にめぐると特徴を示している。類似したものは、近隣に所在する白井塚古墳、八王子市大谷古墳等に認められる。古くから、これらの古墳と多摩の渡来人との関連が指摘されている。現在では、古墳の上に保存のための小屋が建てられ、一般の人でも見学ができる。

愛宕から多摩センター駅を目ざしてくると、駅のそばに東京都埋蔵文化財センターがある。ここでは多摩ニュータウンの開発に伴う、遺跡の発掘調査と研究がなされ、発見された遺物の一部が展示されている。また、隣接して遺跡庭園が設けられ、縄文時代の住居が復元されている。中に入ると、縄文人の息づかいが聞こえてくるようだ。

春の一日、しばし古代のロマンを肌で感じてみてはいかがでしょうか。





丸芝館の鵜飼鮎漁「徒」
(大正5年頃)



丸芝館の鵜飼鮎漁「屋形舟」
(大正10年頃・府中用水の堰上より立川方面を眺む)

立川市在住 板谷 二三男

私は大正三年（1914）に当時の立川村字下和田という所で生まれました。そこは、附近に旧甲州街道の「日野の渡し」があり、多摩川べりの家でした。その頃、私の家では、夏は「丸芝館」という屋号で、多摩川で鵜飼の鮎漁を商売していました。そんな関係で、私はもの心ついた頃から、一年の内200日は多摩川に通いつめていました。文字通り川の中で育ったという少年期でした。大正12年の大震災の時も、川原に放置された縁台の上で、寝ころんでいてゴロゴロと転がされました。その時の、川原が波打ち、川の水がブクブクと沸騰するような異常な体験は、今でも印象に残っています。

その頃の多摩川の水は、私の母校「東京府立二中」の校歌「玲瓏の水 百万の 民の命をつなぐもと 流れてやまぬ多摩川の……」のこの歌詞とそっくりの、まことに「清き流れ」でありました。当時の「川の子達」の一年は、2月11日の「紀元節」今の「建国記念日」の日に「カジッカ」（オコゼともいわれる）の卵を、大きな石をひっくりかえして捕るという遊びから始まりますが、この時の川の中は雪解け水で、手も足も凍えてしまう冷たさでした。それから、秋の十五夜の満月まで川原通いが続けられるのでした。ことに、夏の多摩川は、子供たちにとって興味尽きない。泳ぐ、潜って魚と遊ぶ、釣り等、また、蛙、バッタ、虫トンボ、蟬など、みんな、楽しい遊び相手になっ

てくれたものでした。小鳥や花や草も同様でした。

しかしながら、現在の多摩川は死んでしまった様で、水が駄目な様です。生活廃水や、工業廃水等が流れこんで、水質を汚染し、川の生態系を狂わせてしまったようです。が、最近は、国や都の力で、多摩川の浄化施策を展開していますので、やがては、60年前の多摩川の清流が甦るものと期待しています。現在のわが家の前の多摩川べりにも、立川市の下水道終末処理場が造られています。下水道の後始末や、塵芥の焼却等は、現代人にとって、文化の出発点であり、原点であります。昔、平気で人を殺すという心の荒廃を救うために、神が姿を変えて現れたのが「熊野権限」や「蔵王権限」であると言われていますが、今、「水俣病」など、物質による荒廃を救うために、神が姿を変えて現れたのが、立川市では「錦町下水道終末処理場権限」であり「若葉町清掃工場権限」である、と、私は、自分ひとりでこう名づけて、つね日頃尊敬のまなこで眺めています。

かくして、多摩川が、再び「清き流れ」を取戻したならば、昔のように東京湾からの、天然鮎や蛙の遡上も夢物語ではなく、子供達の多摩川での自然交流も見られるでしょう。

多摩川が昔の姿に甦ってくれるのは、少年期を多摩川の水の流れとともに過ごした私にとって、かえがたい、せつなる期待であります。

甦れ！多摩川

●小さな生きもののいる川づくり

山道省三

多摩川ではこの2月19日に、恒例のサケの稚魚の放流が行われた。サケや色鯉などの稚魚の放流は、すでに全国の河川におけるイベントとして定着し、現代河川の年中行事のひとつになりつつある。このように、従来、内水面漁業の振興を目的として放流されているアユやヤマメなどの産業用稚魚の放流とは別に、環境教育や自然環境の回復を目的として放流される魚が、河川の生態系にどのような影響を与えるのか詳しい報告はない。しかしながらダムや貯水池、溜池、公園池などに、ルアーフィッシングのために個人的に放流されたブラックバスが、他の在来種の稚魚や水生昆虫に大きな影響を与えているとの指摘はかなり以前から行われてきた。これと同様のことが、とくに鯉のように、定着型の魚種の一方的な放流によって引き起こされる可能性があることは、十分に予想される。

この問題をあえて取り挙げた背景には、魚とは別にいま、ホタルやトンボといった水辺の生きものの復活が各地で試みられようとしているからである。ホタルやトンボの幼虫は羽化まで水中で生活するため、コイやフナといった雑食性の魚は、いわば天敵である。従ってこれらの問題を総合的に調整しないと、本来の目的である“川に自然を！”の意図が逆に生態の多様性を損う結果になりかねないからである。それに加え、ホタルにはホタル水路、トンボにはトンボ池といった個別的な施設整備による生きものづくりは、段階的な生態系回復の手段としてならまだしも、本来的な河川環境の回復とは異なる。

先日、多摩動物園の矢島園長にお話しを聞く機会があった。矢島さんは世界に類を見ない多摩動物園の昆虫生態園建設に尽力された方であるが、

以前から園内にホタル水路をつくり、人為的な繁殖を試みてこられた方でもある。人工水路ではあるが、ほとんど手を加えることなく、水を循環させながら生息環境を維持するため、さまざまな工夫が見られる。その矢島さんの話しの中に、ホタルを増やすといっても、幼虫の餌となる川ニナや幼虫を遠い所から持ち込むことは良くない。できる限り近くの、あるいは同じ水系のものが望ましいと話される。つまり、地域によってホタルに個性があり、水が違えばホタルも棲みにくいことがあるということである。このように、小さな生きもの世界は微妙なバランスがあるわけで、単に発生させたり増やすことを目的に、他所からの移殖は差しひかえた方が良いという意見である。

河川や自然環境に対する関心を、こうした小さな生きものを窓口として持たせていくことは賛成である。多くの人の原体験もトンボやホタルといった昆虫や魚をとることがきっかけで、自然に対する関心を深めてきた。だから、川が多く生きものの生息地になることは反対ではないのだが、小さな生きものであっても、人為的な繁殖には十分な注意が必要である。

多摩川にもトンボやホタルが見られるようにとの声が挙っている。数年前には考えられなかったことだが、川にさまざまな要求が出てくることは歓迎すべきことである。しかしながら、多摩動物園のホタル水路が20年以上も続いてきて、「やっと今頃、水路らしくなってきた」と矢島さんがおっしゃるように、小さな生きものを定着させる環境づくりには、時間がかかることを前提に計画を推めていかなければならない。それと同時に、ホタルやトンボ、色鯉、サケといったものが、住民には理解されやすいこともあろうが、多摩川には絶滅を心配されているヒメイトトンボやカワラノギク、あるいはすでにいないとされるスナヤツメウナギ、ホトケドジョウなどの種類がいたことにも留意しておくことが必要であろう。

財団からのお知らせ

〈第三次研究助成選考結果〉

去る12月27日第11回臨時選考委員会を開催し、昭和63年度（第3次）研究課題の選考を行いました。今回選考された研究課題は次のとおりです。

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
(A類研究) ●多摩川活性化の方途 ―水と親しめる町づくり―	柴 田 徳 衛	東京経済大学教授
(B類研究) ●河川の学習機能に関する研究 ―多摩川及び横浜市内河川における子どもたちの活動をケーススタディとして―	並 木 直 美	よこはまかわをを考える会

〈財団の研究助成事業の成果についての紹介〉

(昭和63年12月～平成元年2月まで主な新聞によって紹介された助成研究)

「主婦感覚ヒントに木炭で浅川浄化」

(2月10日読売新聞「多摩の自然を守る」No.15)

以前、財団だよりでもご紹介した活動ですが、八王子市高尾地区に住む主婦のグループが、家庭雑排水による浅川の汚濁を気にとめ、自らの手で浄化を行っている活動の紹介。木炭利用がミソで、ネットに入れたり、針金性の蛇籠に入れて水路に設置を試みたり、あるいは各戸の流しの出口にボックス式の炭を置くなど、さまざまな浄化の為の試行錯誤の様子が紹介されている。

この活動へは、昭和60年に「小仏川、案内川、南浅川流域の水質調査とその河川をきれいにする方法を探る」(一般研究 3ヶ年継続 代表研究者 水野道子)で研究が行われてきたものです。

「多摩川沿いの植物、パソコンプログラムに」

(2月22日 東京新聞)

都立高校の先生が、学外実習用に携帯用パソコンを利用した多摩川の植物特定プログラムの作成を試み、野外視察に成果をあげているという紹

介。この先生は、都立小山台高校の大川ち津る講師で、葉のつき方や特徴などを、次々にインプットすることで、最終的に植物名を特定できるプログラムの開発を行った。

この研究は、大川先生が昭和55年ごろから研究されていたもので、財団の研究助成は、昭和61年「カードとパソコンによる多摩川原の植物の同定」(一般研究、3ヶ年継続、代表研究者 大川ち津る)として行われているものです。

以上、本誌で紹介したものは2件ですが、財団の研究助成等の事業が各所で注目されていることは、財団の活動の大きな励みになります。とくに、一般研究は別名「草の根研究」と呼ばれ、地域住民の方々を対象にした助成事業です。内容としては、どんなささいな研究でも受け付けていますので、大いに参画してもらいたい事業です。

これらの研究報告書や刊行物は財団事務局や流域の図書館、研究機関にそなえてありますので大いに利用して下さい。詳しくは、事務局(TEL 03-400-9142)までお問い合わせ下さい。

〈川に関する最近の書籍と今年の主な行事〉

河川に関わる本として昨年の暮から今年にかけ、上水道、下水道のことについて注目すべき本が出た。ひとつは、「日本の水道はよくなりますか」(亜紀書房1988.10)と題する小島貞男氏(株、日水コン中央研究所)と中西準子氏(東京大学都市工学科)による対談集で、日本の水道問題に詳しい小島さんから、水道の隠された史実をうまく聞き出している。

小島さんは玉川浄水場におられた関係で、多摩川の水質の変化やカシンベック病等当時の様子を詳しく話されている。

下水道については、九州で個人下水道の研究を続けてこられた石井勲氏(第一工業大学)の浄化システムをテーマとした「下水道革命」—河川荒廃からの脱出—(石井勲、山田國廣他、(株)新評論1989.1)がある。この本は、従来の下水道方式とは異なり、個人による下水処理システムを開発し、実践して来た筆者や共同研究者が提言する新たな水循環システム論でもある。

1985年から始まった「水郷水都全国会議」からの報告を中心にまとめた「水の時代をひらく」(木原啓吉編、星雲社1988.11)が出版された。

この全国会議は第1回松江会議が、宍道湖、中海の淡水化事業を凍結させた会議として一躍知られるところとなった。その後、霞ヶ浦、富士市、四万十川と続き、今年は福岡県柳川市で開催されるが、現代の河川、水問題の焦点がうまく整理されている。

一方、技術書としてユニークなのが、「水辺の景観設計」(土木学会編、技報堂出版(株)、1988.12)である。河川の都市計画上の位置づけから始まって環境整備の手法等、従来の河川計画、技術書とは一味違った内容になっている。

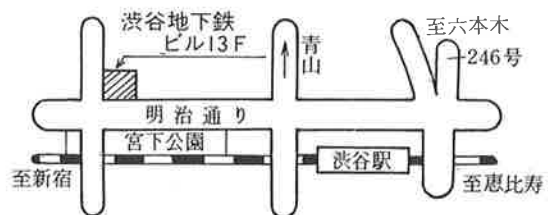
その他、「日本の川を旅する」(新潮文庫)でカヌーの魅力を教えてくれた野田知佑氏が、月刊BE-PAL誌に連載したエッセイを一冊にまとめ「川を下って都会の中へ」(野田知佑、小学館、1988.10)を出している。野田氏は大の多摩川嫌いで、今回は多摩川は登場しない。その理由を知りたい人は「日本の川を旅する」を読んでいただきたい。川から陸を見た^上氏独得の視点がおもしろい。

今年の河川関係の主な催しをいくつか紹介すると、すでに、第2回ウォーターフロントサミットが長崎市で2月18、19日の両日、第2回環境美化シンポジウム—水辺を活用した環境づくりと環境教育—が清水市で2月20、21日に行われている。5月27、28日には福岡県柳川市で第5回水郷水都全国会議が、「水循環の回復と地域の活性化」をテーマに行われる。6月4日には、横浜市で、生きものともちづくりシンポジウムが開かれる予定となっている。8月10、11日には、全国水環境保全市町村シンポジウム(通称名水シンポ)が富山県黒部市で行われる予定である。

多摩川については、大きな会合の予定はないが7月には恒例の多摩川週間の行事がある。

(文責・山道)

- ・発行日 平成元年3月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (0488)31-8125